

大熊アナリシス新聞

「分析」あつて「対応」あり

アナリシス・ラボの川瀬さんに聞く

廃炉関係のさまざまな物質を「分析」

8月7日(木)にジャーナリストスクール3班は双葉郡大熊町にある施設「CREVAおおくま」の中にある「JAEAアナリシス・ラボ」を訪ねた。対応してくれたのは、福島廃炉安全技術研究所副所長の川瀬啓一さん(60)をはじめ職員の方

つていたようだ。

川瀬さんが仕事にやりがいを感じるのは、未知の物を分析して「できないもの」を「できること」に変えることができたときだと語ってくれた。

福島の知見を世界へ 人材確保も視野に

「アナリシス・ラボ」は「福島廃炉安全工学研究所」の一組織。実際の分析方法の体験とJAEA

「廃炉は今まで世界のどこでも経験のない技術なんです。まずは相手がどんな物質なのか分から

く欠片を取り出したばかりです。分析はこれからです。これから長い時間がかかります。私たちが次の世代に引き継がなければならない仕事です。原子力研究は、物理・化学・生物そして文系分野も含む総合的な学問なんです」

まだ廃炉は続く

廃炉は今後も続く。川瀬さん世代の技術を伝承していく人材を確保していく必要がある。

「福島廃炉安全工学研究所」では、廃炉の現状を国民に知ってもらうために様々な活動をしている。廃炉がすっかり終了

ANALYSIS LAB. って？

JAEAは、「国立開発法人日本原子力研究開発機構」の略で原子力に関する総合的な研究機関である。「ANALYSIS LAB.」とは、JAEAの「福島廃炉安全工学研究所」の施設であり、情報発信と廃炉の人材確保を目的としている。「アナリシス」とは「分析」という意味だ。「見えないものが、見えてくる」をコンセプトにして、放射線や分析に関する専門的な内容を、わかりやすく説明している。

し、福島にこの施設がないといわれるのも目標の一つだ、と川瀬さんは話した。

医療用にも活用

JAEAは研究の成果を生かして医療分野への応用にも取り組んでいる。

放射線を使った医薬品は、人工的な放射線を出す物質「アインスターニウム」が付着し、ガン細胞のみを攻撃できるため、体への負担が少ない。

私たちは職員伊藤聡美さんになぜ「アナリシス・ラボ」の「i」が小文字で、最後にピリオドがついているのかを質問した。

小文字(i)とピリオド「おしゃれですね」

伊藤さんは、「よく聞いてくれました。おしゃれだからです。目立つから興味をもってもらいやすい。iを小文字にして検索すれば、間違いなくできます」と答えてくれた。



▲福島廃炉安全工学研究所副所長の川瀬啓一さん



▲持参した物質について成分分析をしてもらう。



▲測定車でホールボディ検査を体験した。



▲ホールボディ測定車前で記念撮影

私たちが作りました。

私達3班のメンバーを

紹介します。岩沢聡真(会津若松市立行仁小学校5年)・八木沼帆菜(いわき市立平第三小学校6年)・佐藤宗介(会津学鳳中学校1年)・福島心(会津若松市立第三中学校1年)・鈴木晴菜(会津若松ザベリオ学園中学校1年)・駒木根璃乃(石川義塾中学校3年)・菅原那音(郡山萌世高校1年)

論説

「廃炉」をいつまで待てばいいのか

燃料デブリとは、原子炉内部にあった燃料が高温で溶け、様々な構造物と混じりながら冷え、固まったものだ。2025年8月時点で2号機から2回目の試験的取り出しまで完了している。しかし、試験的取り出しは既に計画より3年遅れており、廃炉計画全体にも支障が出始めている。燃料デブリの本格的な回収開始時期を、2030年度初頭から37年度以降に遅らせる、と、東京電力が発表した。このまま遅れを取り戻せず、さらに遅れていけば、東電と政府が示す廃炉工程表(中長期ロードマップ)で目標として掲げている「2051年」の廃炉完了を達成できるかも疑問だ。廃炉完了まで100年以上かかるという試算もでてくる。現在、燃料デブリの処分方法はきまっていない。処分の第一歩としての「分析」であることが今回の取材で分かった。廃炉には従来の技術だけでは難しいところもあり、新たな技術の開発も必要だ。そして、長い時間を要することから、技術の継続が可能な廃炉人材の確保・育成も重要な課題だ。今、求められているのは、廃炉に向けたロードマップを見直し、現実的な目標に変え、私たち世代も含めたすべての廃炉にかかわる人たちが一丸となって取り組むことだ。(菅原那音)